広報市民リポーターだより 第6回

長木川と生活排水

リポーター 長岐 美弥子（清水1丁目）

市街地を流れる長木川は、水も澄み市民の憩いの場としても大切な川です。この川がどんな変遷を経て今日に至っているのか、きれいな川を残すために私たちに何ができるかを知るため、大館自然の会会長の明石良蔵氏にお話をうかがいました。

長木川はどのように変わってきたのでしょう？

今は水深の浅い長木川も、昔は橋から飛び込んで泳げるほど深く、子供のころはよく泳いで遊んだという方も多いようです。確かに三十年位前は水量がずっと豊富でした。しかし、昭和三十年代中ごろに〝小坂鉱山の煙で周辺の山林の樹木が枯れてしまう〟という話がでて、それなら煙害を受ける前に伐採してしまおうと、小坂周辺の国有林は広範囲で皆伐されました。そこは長木川の水源林であったため、伐採後は水量が大幅に減少し今日に至っています。水量、水流が乏しいと川の自浄能力も低下します。雨の後に濁流がどっと川に入り込むのは、水源の森が保水力を失っている証（あかし）です。

二十年ほど前には花岡鉱山で製練が盛んでしたが、排水が流れ込んだ下内川が長木川と合流する付近で、カドミウムが検出されました。毒性の強い農薬が流され、洗剤など有害な家庭排水も増え、背骨の曲がったフナやドジョウが見つかったりしてだいぶ問題になりました。その後、鉱山の排水の減少、毒性の強い農薬使用の減少、洗剤の改良等で水質は改善されてきました。しかし、最近の都市化、住宅の増加で、生活排水などの汚染源が再び増えつつあります。

去年、公民館の自然環境保護講座に参加し、長木川上・中・下流にすむ生物を比べました。西大橋の下ではカジカやイトヨなどきれいな水にすむ魚がいて水も澄んでいましたが、下流の餅田橋の下では石がヌルヌルと滑り、汚れた水にすむヒルがたくさん見つかりました。このことからも、川は私たち人間の社会を敏感に反映しながら変化していることがわかります。

明石会長から取材する長岐リポーター

川にだいぶ人の手が加えられてますが？

水をきれいにしてくれるのはそこにすむ微生物や昆虫、魚たちです。まずこれらの生物が生活していける環境をしっかり残すことが必要です。例えばアシ原などの水草地帯には多くの微生物がすみ、微生物は有機物を分解してくれます。その際に発生する窒素やリンは水質悪化の一因になりますが、これは水草などについた付着藻類が吸収してくれます。また、これら微生物や藻類は魚や鳥に食べられて増え過ぎることなく、バランスが保たれます。

護岸工事などで川をコンクリートだらけにして生物がすめないようにしてしまうと、水をきれいにする力は著しく損なわれます。また、川は元来蛇行しているもので、速瀬では泡立つ水が生物に欠かせない酸素を空気中から取り入れ、瀬や淵（ふち）はさまざまな生物に適した環境を提供してくれています。まっすぐな川に変えると、生物の多様性も失われてしまうのです。

未来のために まずできることから

これまで長木川の移り変わりと川の生態系について、明石会長にうかがいましたが、主な汚染源である生活排水の見直しは川の浄化に欠かせないだけでなく、私たちが取り掛かれる最も身近な対策でもあると思います。私が考えていることをいくつかまとめてみました。

①米のとぎ汁は流さず植木や庭にまく

②野菜くず、食べ残しは流さず生ごみとして出すか土に戻す

③ろ紙袋やストッキングをかぶせた三角コーナーをつける

④食器に残った油は紙や布でふきとってから洗う。米ぬかをつけてゴムべらでぬぐうと汚れがよく落ち、米ぬかは生ごみとして出せる

⑤合成洗剤ではなく〝せっけん〟を使う（せっけんは微生物により完全に分解されるが、合成洗剤は完全に分解されず水中に残る。有毒で水生生物を死なせ、人間にも有害）

⑥シャンプー、リンスの代わりにせっけん、酢で洗髪する（シャンプー、リンスは合成洗剤と同様。皮膚にもよくない）

⑦せっけんなどは使い過ぎない

このうち一つでもまず始めてみることが、きれいな川を残す第一歩になるはずです。

「この地上の自然は、未来に生きるすべての生物からの預かりものである。」という信念が、アメリカ・インディアンの思想の根底にあるそうです。環境問題は命の問題です。私たちの世代だけでなく百年、二百年先といった長いスケールで考える心が必要です。私たち人間のエゴイズムを見極め、わずらわしさから逃げずに、身の回りでできることから一つずつ実行していくことが、今、求められています。

◇広報市民リポーターだよりは、毎月1日号で、6人のリポーターが独自に取材した記事を掲載しています。